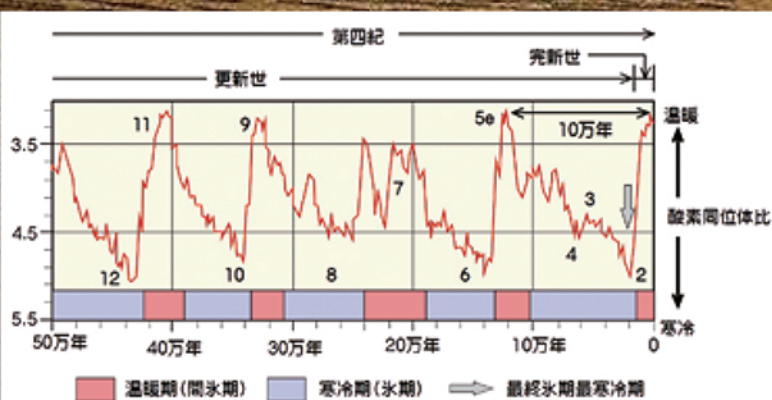


島のむんがたり

徳之島の地形の成り立ち

今回は『徳之島町史 自然編』から徳之島の地形の成り立ちを紹介いたします。

まず、図1です。過去50万年の地球の気温変化の様子を表しています。ほぼ10万年周期で寒冷期と温暖期を繰り返しているのがわかります。期間の多くは寒冷期で、温暖期はそれぞれ1万5000年から2万5000年ほどです。太陽の周りをコマのように自転して



(図1) 10万年周期で寒暖を繰り返す第四紀中期から現代までの地球の気候変化

いる地球のリズムのようなものです。そこに約2万5000年周期の地軸の揺れ(歳差)も加わっています。現在の地球は温暖期の終わりごろにあたります。

温暖期と寒冷期では地面の高さが変わります。図2は約2万年ほど前の寒冷期の海面の位置です。現在の海面はその頃に比べて百倍以上も高くなりました。逆にいうと、地球のリズムからしてあと1万年ほどで図2のような徳之島になる可能性が高いということになります。徳之島町側を中心に沖合5キロメートル先まで陸地が広がります。図3の海の部分が陸地になったと思うとワクワクします。見てみ



(図2) 海面が100m以下だったときの徳之島 ※水深はその時の深さを示す。

たいものです。

天城町の下原洞穴遺跡から、最近1万3800年前の縄文時代草創期の土器が発見されていますが、その頃の徳之島は図2に近い姿だったのでしよう。徳之島町の沖合数キロが陸地だったのですから、現在の人々が海岸線に住むように、人々の生活の場も現在の海の中にあっただのかもしれない。つまり徳之島町側の縄文草創期の遺跡は、海の中にある可能性が高いわけです。

もっとも陸地の姿は一定だったわけではなく、大きな浮き沈みを繰り返しながら島々は成長していきます。例えば、標高約200mの亀津の大原などは40万年前は海岸でした。また、亀津市街地は60m前後の段丘で囲まれています。そこは10万年余り前までの海岸線です。徳之島南部域は琉球石灰岩でおおわれていますが、これはこの地域が過去40万年ほどの間に持ち上がったことを示します。逆に大島本島側は沈み、山の部分が残っています。その様子は、船から徳之島の形をよく見るとわかります。南から北にかけて少し傾斜している様子が見て取れます。



(図3) 花徳浜の前に広がる海。1万年後、この先5 km 以上が陸地になるかもしれない。

これまで何気なく見ていた風景も知識を得ると思わぬ発見があります。興味深く見る事ができるようになりそうです。せっかく世界自然遺産登録地の徳之島に住んでいるのですから、徳之島のことをもっとたくさん知って大いに楽しみましょう。『徳之島町史 自然編』もぜひお買い求めください。

(町誌編さん室 米田博久)

問 郷土資料館

☎ 0997-82-2908